

ときに、中高年の女性が言ってもなかなか耳を傾けない経済界の人とか、行政の人たちが、100兆円が動くのよと言ったら、目の色が変わってきたんですが、積み積み積もっていけば、そのぐらゐの話の世の中を変える力になるのではないかと考えております。

● 仕事場を作る—生産のための拠点づくり

最後に、それでは、私が今これから本気で挑戦しようと思うのは、私自身も財産も何も無い立場なんですが、やはり人の輪の中で生きてきた。これからも生き続けていく。そのための終の住みかど仕事場をつくるということで、今夢を描いております。これは、世代、性別、国、障害を超えてつながれる暮らしと仕事、この仕事を入れるということが、私が強調したい点なんです。暮らしと仕事の楽園。

今たまたま富士山の1号目にひまわり村という農事組合をつくっている方がいらして、農業をすればいいという話はよく言われるんですが、農業をしながら業としてお金を稼ぐのは大変だろうと。そこで、キクラゲというものを今生産し始めております。これは、酵母のような……。キクラゲは今中国が主な生産。でも、生のキクラゲをつくって、ものすごくおいしいんです。体にはすごくいいわけです。キクラゲから始まってキノコだと、いわゆる野菜工場としても違う形であるということから、これで確実に経済基盤をつくると。これは、2月に1回とれて、年間六毛作で、それで2か月で30万の利益があると。自分がもうちょっと働けば、もうちょっと収入を得られるらしいんですが。そんなような、メインの食べていく商材があって、そのほかに畑があったり、ハーブガーデンを作ったりしながら。

それで、もう1つは、シェアハウス型のサ高住、サービス付き高齢者賃貸住宅を作ろうと考えております。最後に、お墓まで、富士山の見えるところで、そこは非常に広いところなので、樹木葬までできたらいいなと。今とりかかったばかりなんですが、住まいもロッジ風のを自分たちが作りながら、センター機能で食堂だとか、お風呂場だとか、あるいは図書室はみんな本を持っているでしょうなんていうので、足せるもの。今までの住宅関係は、サ高住でもそうなんですが、最初に住宅産業として金融業的にお金を動かすんですが、そうではなくて、小さな自分空間をそれぞれよければ足していく、作り上げていく。いわゆる消費の経済活動ではなくて、生産のためのできることから、多様な参加のできることをやってみたいと。まだそのプランニングをして、何回か現場に行きながら考えているときなんですが、これは初め女性たちから始まったんですが、実は私の本音は、是非、退職した男性たちが、ここですと、マンションの一室で奥さんに邪魔がられなくても済むし、いろいろな意味でずっと生産行為もできるし。まずは自然豊かなところで包まれながら、自分のちっぽけだった人生をもう1回元気に取り戻せていけないのではないかと。

● 女性の役割

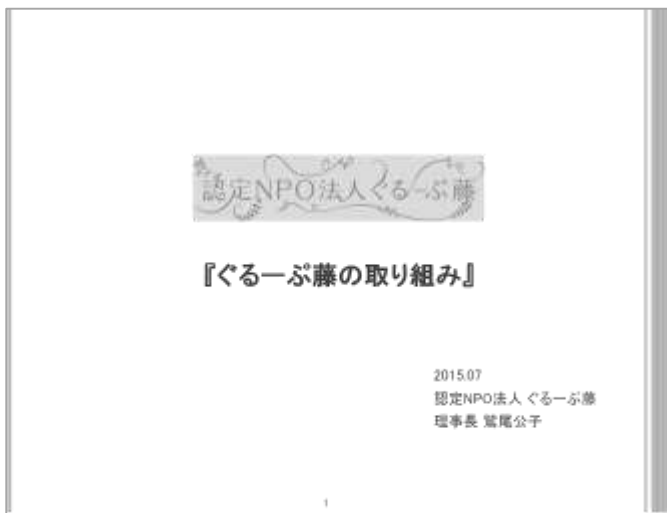
私自身がちっぽけな人生を歩いてきているわけですが、最後まで1人ではなくて、そこに仲間がいてくれたり、何かすることがあったり、お金がそう大きくは動かなくても、月に5万でも収入があり続けていくと。これは1例として、今私が力を注いでいるプロジェクトの1つなんですが、そういう意味で動かなくなったときにでも、何とかお金を得続けていくということをそろそろ本気で、皆さん、お金のことに対してはなかなか言いにくいんですが、やはり本気で考えないとまずいのではないかと。

私たちはこういうことをしながら、女性の場合には、特に日本の文化をつなげていく役割があるような気がしています。着物にしても、食べ物にしても、やはり日常の生活文化を次世代につなげていくために役割、責務が今あるような気がしています。私どもの親がぎりぎりまで持っていたものを、どうやって文化をつないでいったらいいのか。各地の生活記録を普通の女の人たちが記録するというのも、私どもではこのスマートエイジングネットの、今まで独立してきた女たちが最後まで、20年、30年生き続けていくために、本気で動き出してきました。是非、御一緒にいろいろなことをさせていただけたらうれしいと思います。

【川瀬】 澤登さん、ありがとうございました。我々が期待すべき存在として、高齢者というキーワードのほかに、新たにやはり女性というキーワードも加えていかなければいけないのではないだろうかというお話です。お金の問題につきましては、なかなかこういうところでの議論になりにくいところですが、やはりそれぞれの人生、要するに100年生きるとして、どうしていくんだと。例えば私も家内と二人暮らしなんですけれども、どちらかがこれから20年、30年の間に介護状態になる可能性というのは当然あるわけで、そのときのために幾らお金を用意していたらいいのかというのは、今全く見えない状況にありますからね。そういうことも、後ほどまたこのお金の問題についても議論になろうかなと考えています。

それでは最後に、認定NPOぐる一ぶ藤の理事長をお務めの鷺尾公子様から御発言をいただきたいと思います。今、藤沢というまちは、新たな福祉のまちづくりという点で様々な活動が展開されていて、非常に多方面から注目を浴びています。そんな中で、民間主導型といいますか、藤沢で長年活動をなさって、様々な成果を上げていらっしゃいます鷺尾さんから、実際の活動事例を中心にお話をいただきたいと思います。

【鷺尾】 皆さん、こんにちは。ぐる一ぶ藤の理事長をしております鷺尾でございます。今のお二方の発表を聞いていて、私のは各論だと思って聞いてください。実際に地域で実践していることを今日はお話しさせていただきます。私自身は、30代で親の介護を7年間続けまして、母を送り出したときにもう40代になっていたんですが、これは大変なことだなどしみじみ思いました。



5人兄弟で私は末っ子で、女3人と兄嫁2人、全員が専業主婦で、しかも母が住んでいる家の周りにほとんどの者がいるという、母にとって大変恵まれた環境にありながら、私たち介護をした人間は大変つらい思いをしました。それで、これは母の時代はよかったけれども、私のときになったらどうなるんだろうかというふうに関心意識を持ちました。私自身はちょうど団塊の世代真ただ中の人間で、いつも厚労省が発表される2025年の超高齢化の私たちのために、これは発表されていると思うような立場に今おりますので、活動を続けています。

●ぐるーぶ藤の沿革

私たちは、活動を始めてからちょうど今24年になります。ここ、東京なので近いので、皆さん、藤沢はすぐわかってくださると思いますが、神奈川県の中のここにいます。藤沢は縦に長い、人口42万の都市なんですね。東京のベッドタウンというような位置づけにあるかと思いますが、これは、ちょうど15周年のときに私が書いたものです。私たちは5人の主婦で立ち上げたんですが、5人の主婦がまるでボートで荒波にこぎ出したようだったと。嵐にも遭いながら様々なことがあって、今はこの一番館という福祉マンションを作ったときに、これ、「飛鳥」と呼んでいますが、ちょっとの雨風ではびくともしない船になりましたと。多分今年中には二番館の土地の契約ができると思いますが、二番館を建て、長期目標としては3番館まで建てるという目標を持っておりま



3番館まで建ったときには、この飛鳥がクイーンエリザベス号になるというふうにもみんなで目指して、活動しております。当初5人の主婦が、全員が専業主婦でしたが、私自身の体験からみんなに呼びかけて、何か地域に役立つ働き方をしないと、自分たちの老後はないよということで始めた活動でした。

最初はワーカーズ・コレクティブという組織から始まり、99年にNPO法人格をとり、2000年に介護保険に参入して、私たちはいつも助け合いから始めていますが、地域の中で福祉の最前線にいると自負しております。様々な活動の御利用者のもとに支援に行っているときに、たくさんのニーズをつかむ位置にありました。そのニーズをつかんだところが、やはり最終的にみんなが安心して住める——安心して死ぬ場所が欲しいと、すごく言われましたが、みんなで死ぬまで安心して生きられる場所を作ろうじゃないかということで、福祉マンション、「ぐるーぶ藤一番館」というものを作りました。

これ、2007年に作ったんですが、このとき1階にコミュニティーレストランがあり、ここに子供たち、幼稚園があり、2階に精神障害のグループホームがあり、3・4階に高齢者住宅というように、1つ屋根の下に子供から、障害から、今ちょっと元気な私たちから、今人の手を借りたい高齢者まで、みんなで1つ屋根の下に住むのが私の理想だった。そういうのを実現したのが福祉マンションでした。

●子供と障害者と高齢者

2007年にこれが建ったときに、本当に私たちこそ驚いたんですが、日本で初めてと言われたんです。子供から、障害者から、高齢者までが1つ屋根の下で。新聞、テレビ、雑誌、ラジオ、全てのメディアに出まして、何かすごくそのときにメディアにさらされちゃったんです。それで、実は今、今年で丸9年目を迎えますが、いまだにここの見学者が後を絶たないんですね。今はこのようなマンションが幾つもできています。だけれども、「どうしてこんなマンションができたんですか」と自治体の方からも質問されたりするんです。

「子供と障害者と高齢者が一緒に住むことができるんですか」というような質問を受けるんですが、私たちは、先ほども言いましたように全くの素人で、専業主婦で、言うなれば温室の中にとずっといた私たちは怖いもの知らずなんです。障害者と高齢者がどうして一緒に建物の中に住んじやいけないのか、そんなこと考えてもいなかった。私たちが理想とする住まいを作りたいかっただけなんです。なので、私たち、ほとんどが、今メンバーが130名いますが、男性は5名ぐらいです。ほとんどが女性です。そういう中で、私たちは、でも、じゃ、女性だけでやってきたのかと言ったら、そんなことはないです。私たちの周りにはいる夫たち、息子だったり、娘だったり、これを全て社会資源というふうに私たちは呼んでおりまして、その社会資源をフルに活用して今の藤があります。じゃ、何が一番社会資源を活用したか。私たち、このマンションを作るときに資産ゼロでした。お金、一銭もなかったんですね、助け合い活動と、介護保険の活動はしていましたが。

●すまいづくり研究会

ただ、これを作るために、すまいづくり研究会を立ち上げました。全くの素人の自分たちが夢だけ追っていて何もできないじゃないかと思って、ここに自分たちが理想とするマンションに関係する、必要と思われる人15名、ピックアップさせていただきました。ドクターだったり、公認会計士だったり、一級建築士だったり、ケアマネジャーだったり、障害者御本人だったり、障害者を持つお母様だったり、それから子育て中の人。私たちが作りたと思う理想の、それにかかわってくれそうな人をみんな集めて研究会を作りました。

●福祉マンションの設立

研究会を立ち上げて、2年間、調査をしたり、見学、意見交換して、丸2年でその研究会を閉じるときにフォーラムを開いて、お金を一銭も持っていない普通の主婦たち、市民が理想とするマンションを作るにはどうしたらいいかという1つの答えを導き出しました。私は、その答えを手に、すぐに福祉マンションづくりに取りかかったわけです。

そのときに出た答えは、土地を持っている高齢者か、高齢者を抱えていらっしゃる方で、相続税対策でその土地に銀行から30年間借金をして借りて建ててくださったら、私たちがそれを30年間はお借りして運営しますよというプランでした。それで、すぐに福祉マンションに取りかかったんですが、実際は様々な出会いがあって、私たちは土地を買うことができました。

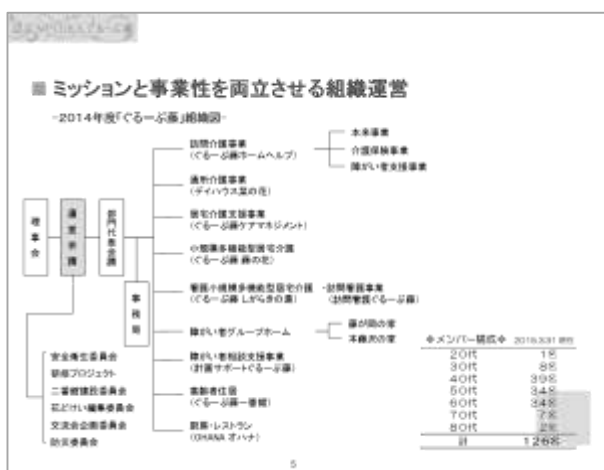
「花どけい」という私たちの機関紙を今日配らせていただいています、その表紙の下に私たちの事業が全部書いてございます。それが今やっている私たちの事業内容です。この助け合いは24年間ずっと赤字ですが、自分たちの「本来事業」と呼んで大事にしています。

| ■「認定NPO法人ぐるーぷ藤」事業内容 | |
|---------------------|--|
| 本業事業 | 藤たすけあいサービス、ふれあいサービス、子育てサービス |
| 介護保険 | 訪問介護、通所介護、居宅介護支援、看護小規模多機能型居宅介護、小規模多機能型居宅介護 |
| 障がい者支援 | 訪問介護、障害者グループホーム(なか所)、障がい相談支援 |
| 養護 | 訪問看護、施設看護 |
| 高齢者住宅 | 21室 |
| レストラン | OHANA(オハナ) |
| 福祉相談窓口 | 看護師、保健師、ケアマネジャー、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、保育士、(弁護士、税理士)が随時対応 |
| 地域ささえあい事業 | ヨロシクマるたい |
| 幼児教室 | どんぐり園(賃貸) |

●藤たすけあいサービス

特にこの藤たすけあいサービスといいますのは、ワンコイン、500円ぽっきりで、子育て支援に行きます。赤ちゃんが1歳になるまで、ワンコインで1時間500円、交通費もいただかない。これが私たちNPOの心意気だと思って、高齢化のほうで、介護保険事業でしっかりとお金を稼がせていただくと。でも、少子高齢化とワンセットで考えるべきなので、子供たちのためにそのお金を使うという形で、御利用者からは1時間500円しかいただきませんが、うちで働くスタッフは時給をそのまま払うという形で、ここが私たちが認定NPOとしての心意気を示すということをやっています。

これが組織形態ですね。今は私、60代、ここですね。もうすぐこっちに入るんですけども、団塊の世代です。立ち上げたときのメンバーがほぼ20年たっていて、24年たっている。みんなこの年代、私、40代で立ち上げましたので。でも、特筆すべきは、うち、40代が39名もいるんですね。



●ミッションと事業性を両立させる組織運営

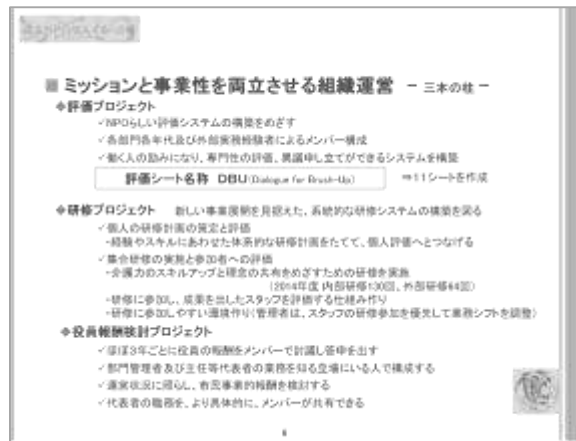
年代からいって、ほとんどのNPO、私たちと一緒に歩みをともしてきた20年選手のNPOというのは、働く人が今ほとんど60代、50代が中心です。唯一ぐるーぷ藤は40代がこんなに増えている。30代もいるんですね。これは、まさに私たちが、上に書かせていただきましたように、ミッションと事業性を両立させる組織運営をずっと心がけてきたからだと思っています。先ほど澤登さんのお話の中で、ああ、まさにこれが出てきたなと思いつつ聞いていたんです。やっぱり高齢者が働いていくには、人と金とその場が必要だよというお話がさっき出てきて、急いでメモりました。まさに私たち、それを実践しているかなと思いました。

その場づくりを、今日は一番最後にお話をさせていただきたいと思います。私たちは組織として、全くの素人、主婦が集まった組織ですが、その中でだんだんと自分たちなりに勉強して、成長して、いつも考えていることはミッションと事業性の両立です。自分たちの目的だったり使命、思いだけではNPOは続きません。みんな今50代、60代で、後に続く人がいないところは、やっぱりミッションだけを頭に載せて、私たちはいいことをしていますと。

●組織の中核「3つのプロジェクト」

もちろん、それも1つのやり方だとは思いますが。ただ、私たちはまちづくりということを目指しているからには、自分たちだけで終わるわけにはいかないんです。次の人にバトンタッチするためにどういう事業運営が必要かということを絶えず考えて私たちは組織運営をしてきました。私たちの3本柱があります。1つが評価プロジェクト、もう1つが研修プロジェクト、最後に役員報酬検討プロジェクト、この3つのプロジェクトを2005年から発足させて、中心的にやっています。

この評価プロジェクトは、評価シートの名前をDBUと、Dialogue For Brush-Upなので、自分磨きの対話シート、評価シートと言っていますが、これは自分自身の振り返りシートですよというふうにみんなで名前をつけて作りました。これは、1期3年で6年間かけてみんなで作りました。NPOらしい評価システムを作りましょうと。なぜこれを作ったかといいますと、最初私たちは全員賃金が一緒でした。働く価値は一緒ということで、全員が同じ時給でした。



でも、だんだんみんながおかしいよね、介護福祉士という国家資格を持っている人と、今日子育てが終わって、週に2時間だけ働きたい、そういう人がどうして同じ時給なんだろうというふうに、1つの壁にぶち当たったんですね。そのときに、じゃ、誰が時給に差をつけるの。そうしたら、そのための物差しがなければいけませんよね。そのためにつくったのが評価シートです。働く人の励みになりながら専門性の評価をしたり、異議申し立てができるシートを作りましょうと。今11シートでき上がっています。これは、スタッフがまず1月に自己評価をします。5点法です。1月、自己評価。2月に他者評価、これは主任クラスがその人の評価をします。3月に、管理者が最後の評価をして、一人一人全員と評価面接をして、ほぼこれで来年度のボーナスが決まるという評価システムを作っております。2つ目が、研修プロジェクトです。私たちは実はおびただしい数の研修をしています。昨年度の研修が、内部研修が130回、外部研修64回、合わせて194回の研修です。なぜこうなったかといいますと、最初全員が素人の主婦でした。しかし、家事援助をしたり、最初のときはちょっとしたお手伝いから始まりましたが、介護保険が始まる少し前あたりからかなり高齢の方が増えてきて、お世話がたくさん必要になってきました。高齢者のケアをするために働く人の体を守るためにも、知識と技術が必要なんです。もちろん、藤の私たちのスタッフは、受付に座っている者まで全員福祉職という位置づけで福祉の資格を持っております。